

RIST30周年によせて

東海大学 九州キャンパス長

荒木 朋洋



RISTは、産学官が連携し、産業技術に関する基礎技術の研修、調査研究、共同研究、および情報交換等を行うことにより、熊本の産業技術の開発および実用化を促進し、地域産業の技術高度化および関連企業の振興を図ることを目的として設立され、このほど30周年を迎えます。30年前はどのような時代であったかを振り返ると、いわゆるバブル景気の只中で、PC-9801が発売され、研究室でも全財産をはたいて50万円ほどで購入した覚えがあります。この頃からカラーモニター、記録媒体も8インチから5インチ、3.5インチと小型化し、技術の進歩に驚いていました。この頃、生命科学の分野でもUNIXの電子メールを使って海外研究機関でのリモート解析が出来るようになってきました。このように情報化社会の幕開けと同時に発足したRIST(熊本知能システム技術研究会: Research for Intelligent System Technology)ですが、2008年の20周年を機に、新たなRIST(くまもと技術革新・融合研究会: Research for Innovation & Synthesis of Technology)と生まれ変わり、IoTやAIの進歩で急速に変革してゆく社会の牽引力となってきました。新生RISTの時代がちょうどTLO(大学等技術移転促進法)による大学での知財戦略が浸透してきた時代で、まさに時代を先取りした取り組みをなされてきたと敬服いたします。

さて、現在の社会は、わが国のみならず、大きな変革期を迎えています。昨今の技術進歩で、生活は便利で豊かになり、IoT、ロボット、人工知能

(AI)、ビッグデータなど、情報化社会が成熟期を迎えるかに見えます。しかし、私の専門分野である生命科学にしても、技術進展で、最先端の分析機器が高度な解析を処理する時代となったにも関わらず、そのデータが十分に活用されず、ただデータだけが膨大な量になりつつあります。政府はこのような情報化社会の次の社会としてSociety 5.0を提唱しています。サイバー空間に蓄積する膨大なデータとフィジカル空間との融合、これが解決しないと冗長なデータだけが膨張し、経済発展の遅延につながります。日本はまさにこの課題を解決する先進国としての英知を集結すべき時期に来ていると思います。

熊本は2016年に未曾有の大地震に見舞われ、今復興の途上にありますが、熊本県知事による「創造的復興」のリーダーシップの元、熊本県や熊本市による将来計画が進んでいます。桜町再開発事業による熊本城ホールは2019年には完成予定で、熊本駅新駅ビルが2021年に開業予定、また、大空港構想による阿蘇くまもと空港の新ビルディングが2022年から運用開始予定です。熊本はこのような環境を生かし、産官学が連携して日本のみならず、世界にその成果を発信できるまたとないチャンスに来ていると考えられます。熊本で伝統あるRISTが今後のさらなる技術革新の牽引役としてその中心的役割を担われることを期待いたします。